

宮沢賢治とグスコーブドリ

平成 29 年 2 月 23 日

敏翁

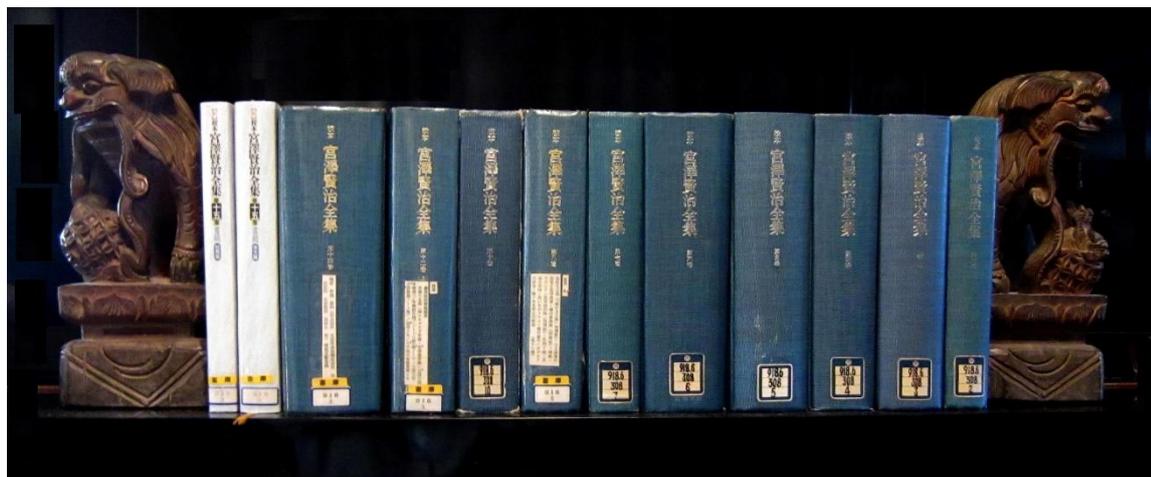
昨年私のホームページに掲載(12月23日)した『ジャータカ、倉田百三と宮沢賢治』(以下前報と記す)で、賢治がヴェッサンタラ本生から強いインパクトを受け、ついに「グスコーブドリの伝記」製作に至ったと記しました。しかしこれは全くの私の直観によるもので、もう少し詳しく調査し、最後に私の想像も加えて、賢治がヴェッサンタラを經由してグスコーブドリ創出に至った経緯を小説的筋書きとして創作したのが本稿です。

1. 宮沢賢治全集

賢治の作品は、一旦完成したあとも次から次へ書き換えられて全く別の作品になってしまうことがある。宮沢賢治の全集は、戦前から何度も発行されているが、全集の編集者が判読に苦勞するケースも少なくなかった。

そうした背景から原稿の徹底した調査に基づき、逐次形態を全て明らかにする『校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房、1973～77年)全14巻が刊行され、作品内容の整理が図られた。

さらにその後に発見された資料を加えて『<新>校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房、1995～2009年)が刊行された。<新>校本は冊数が多く、ほぼ全体を手元に置いて比較検討するのに不便なので(私が県立、市立図書館から一度に借りられる冊数は16冊)、校本を主体として(書簡のみ<新>校本とした)借りたものを例によって書架に並べた姿をご覧に入れる。左の白い背の2冊が<新>校本である。



これらを通読して分かった事を以下箇条書きに纏めてみる。

1.1 グスコーブドリ関連

- ① 「グスコーブドリの伝記」の最初の形態は「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」であり、これが「グスコンブドリの伝記」となり、最後は「グスコーブドリの伝記」となって1932(昭和7年)『児童文学』第2回に発表された。

賢治の童話や詩は、その主要な作品はウェブで閲覧可能になっている。それを利用して本稿では可能なものにはリンクを張る事とした。閲覧には赤枠をクリックされたい。

- ② 校本第7巻の「校異」(p446)によると

「ネネム」の草稿末尾は、宮沢家で働いていた關鐵三氏が賢治の依頼を受け大正11年頃に

筆写したものである事が分かっている。

賢治が「ネネム」執筆を始めたのは、それより以前である事になる。

- ③ 賢治の年譜(校本第 14 巻、堀尾青史によるもので全 303 頁に及ぶ力作)によると、宮沢清六(賢治の弟)の著作で「大正 7 年夏、童話『蜘蛛となめくじと狸』、『双子の星』を読んで聞かされたことをその口調まではっきりおぼえているとある。(中略)この時期から童話の創作がはじめられたことになる。」とある。
- ④ 「ネネム」が書かれたのはこの少し後ではなかろうか。
後述するが(⑨)、賢治が「ヴェッサンタラ」に惹かれたのもこの頃の筈で、「ネネム」執筆との前後関係を確定するのは困難である。
- ⑤ そして「グスコン」は昭和 6 年 3～7 月に書かれていた事が解っている。(校本第 12 巻上 p693)「クスコー」の投稿は昭和 6 年の後半なので、両ブドリの執筆はこの時期集中していたらしい事が分かる。
- ⑥ 「ネネム」展開の場は「化けものの国」で両ドブリ展開の場であるイーハトーヴとは大いに異なるが、ネネムとブドリの生い立ちはほぼ同様である。即ち両親は凶作の中で餓死し、妹は人さらいにさらわれる。
- ⑦ ネネムは困難な状況にも拘わらず、独学の結果化けものの国の裁判長となり、活躍する。原稿の最後のあたりは紛失していて結末ははっきりしないが「捨身」に通ずる気配は見当たらない。
- ⑧ 両ブドリのストーリーはほぼ同じだが、長さは校本で見て、グスコンが 45 頁、クスコーが 31 頁である。
賢治の文章はトリビアリズム的なところがあり、その辺りを投稿に際して、紙数に制限があったのかも知れないが、カットしたのが最終稿だと思う。

1.2 ヴェッサンタラ関連

賢治がヴェッサンタラを文章化したのは、3 回である。(前報出 伊藤雅子「ベッサンタラ王渉典」)

⑨その 1 保坂嘉内宛て書簡 94 は 1918(大正 7)年 1 2 月 10 日前後である。

⑩その 2 「学者アラムハラドの見た着物」

執筆の時期は不明だが、それが収録されている校本第 8 巻の「校異」(p 537)によると

『なお、本草稿については 42 年筑摩版全集後記に「他の原稿の置き場所とは別の押入れから一篇だけ死後発見されたものである」と記されている。』とある。

これは一体何を意味するか。

⑪その 3 詩 1052 「ドラビダ風」

この詩には日付が書き込まれている。1927(昭和 2)年 5 月 1 日

しかしこれは創作過程のものであって、それが収録されている校本第 6 巻の「校異」(p 741)によると

『本篇が発展して詩稿用紙に書き直された形が、第 4 巻所収「1022[一昨年 4 月来たときは]」および「[生温かい南の風が]」である。』とある。

この 2 篇を見ると「ドラビダ」も「ヴェッサンタラ」も全く現れていない。

これは一体何を意味するか。

2. 研究資料

宮沢賢治については戦前から膨大な研究が発表されている。

それらについても可能な限り目を通す事にした。

戦前から昭和 40 年までに発表された研究資料を纏めたものが出版されている。

續橋達夫編『宮沢賢治研究資料集成』全 21 巻 別巻 2 冊 日本図書センター発行である。

その別巻には、續橋による「宮沢賢治研究史」があり、大いに参考になった。

また別巻には索引がついていて、「グスコブドリ」で検索して分かった関連研究が掲載されている 8 冊と別巻 2 冊を、これもまた県立と市立両図書館から借りて目を通した。

例によって書架に並べた画像をご覧に入れる。



左端にある白い表紙の本は、**奥田 弘**著『宮沢賢治研究資料探索』蒼丘書林発行 2001 年 である。この中に「宮沢賢治の読んだ本」というタイトルで賢治が所蔵していた図書の目録が掲載されている。

- ⑫『**集成**』に収められたグスコブドリに関する研究の中で、私が最も核心を突いていると思えるのは、第 16 巻に収められている**丹慶英五郎**によるものである。

同氏著『宮沢賢治作品と人間像』若樹書房発行 昭和 37 年 全 39 頁
その核心と思われる部分を引用する。

「グスコブドリの伝記」は、ある意味では、賢治の自叙伝ともいうべきであろう。ここには、現実の宮沢賢治の自叙伝を読みとることも可能であるが、また同時に、理想の宮沢賢治の自叙伝を読みとることも可能であろう。

むしろ、ここには、より多くの、賢治の理想的な自画像あるいは理想的な宮沢賢治伝をわたしたちは読みとることが出来るし、また読みとるべきなのである。

「グスコブドリ」は、賢治が自己の理想として憧憬したところの、まさにある意味での、近代的英雄の名に値する一人間像なのだという見方も、たしかに出来ないことはない。

賢治の羅須地人協会時代の実践活動が、ある意味からは積極的な評価に値するにもかかわらず、結局に於いては挫折に終らざるをえなかったことを思えば、その挫折した痛ましい姿勢のただなかより、賢治が自己の理想的人間像を心にありありと描き出したとしても、別に不思議ではないはずである。

賢治は、いくらか誇張した言い方になるが、ブドリのように不遇に生い立ち、ブドリのように働きながら勉強し、ブドリのように献身的に活動し、ブドリのように壮烈に死んでさえいきたかったのだ。

賢治は、実際に、事実に於いて痛切にそう思ったのかも知れないのだ。

私も上記下線部分は全くその通りだと思うのだが、丹慶氏が、ドブリの死を「英雄的な死」と言っているが「捨身」の概念に到達できていないのが残念である。

- ⑬「捨身」として捉えているのは、『集成』第8巻に収められている須田浅一郎による『宮沢賢治と仏教』の一節である。この投稿は全98頁もあるもので、雑誌『四次元』の第3巻第7号、昭和26年9月～第6巻第1号、昭和29年1月、に断続的に連載されたものである。

その本生譚と賢治の関係を論じた中の一節を引用する。

又この捨身の点に着目すれば、本生譚がその種子を下ろし開化結実したと考えられる重要な一作品があります。それは「グスコブドリの伝記」です。

先にも述べたように、本生譚の究極の主題は身命を投じてもはたさなければならぬ慈悲の具現であります。

「完全なる智慧を具えた愛」から発する行動に於ては身命を捨てて惜しくない、身命を投ずるに価する、と本生譚は謳っているのです。

「グスコブドリの伝記」にはこの本生譚の言わんとするところがすべて含まれている様に思われます。グスコブドリの学術研鑽は、宮沢賢治の農芸化学研鑽の写象でもありましようが、

「完全なる智慧」に向っての一つの精進の過程を描いているという見方もあっていいと思います。

ブドリの最後の行動は本生譚的な文字通りの「捨身」です。そこに見られるものは熱狂的な、或は感傷的な犠牲としての自殺行為ではありません。冷静であって、而も止むに止まれぬ、クーポー大博士にもペンネン老技師にも止めようのない、「完全なる智慧」による思考の帰結としての「捨身」であります。

「グスコブドリの伝記」によって本生譚はイーハトーヴオの地に見事に開花し、結実したといえるのではないのでしょうか。(1951年6月19日)

この文にも同意するのだが、須田氏が仏教全般にわたって賢治との関係を論じ、「学者アラムハルドの見た着物」にも触れているにも拘わらず、ヴェッサンタラとブドリの関係に議論が及ばなかったのが残念である。

- ⑭『探索』の中の蔵書目録は相当な量に上るが、私が特に関心を持ったものを二つばかり記す。

1. 『国訳大蔵経』(和装本全30巻)大正6年～

この第13帙(大正7年6月15日発行)に「エ` ッサンタラ所行品」(*1)があり、

第12帙(大正7年無2月28日発行)に「国訳弥蘭陀(ミリンダ)王問経」がある。

また第5～7帙に「華嚴経」が収められている。

2. 『華嚴哲学研究』 亀谷聖馨著 大正11年

賢治は熱狂的とも言える日蓮宗の信者であり、その根源は「法華経」であるが、「捨身」について検討を進める中で華嚴経も読んでみて、その膨大な体系に戸惑って本書を求めたのではないかと思う。

3. 宮沢賢治のグスコブドリ到達まで

以上の読書・調査を踏まえて、賢治がヴェッサンタラを経由してグスコブドリの人間像を構築するに至った道筋を考えてみた。

これは、今まで誰も行った事のないワークであり、という事は、明らかなエビデンスがある訳ではないのである。

であるから、伝記と言うより小説的なものにならざるを得ないのだが、小説として描くには私の文才は乏しすぎる。

時系列的に筋書きを記すに留める事になった事を許されたい。

- i. なに不自由なく成人した賢治は、東北の貧農のなかにあつて、自分の生い立ちが一番の重荷になっていた。
- ii. その中で、貧農の中に育った人物が労働と勉強で成長し、遂には幸せを掴むに至る童話を書きたかった。これが「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」である。
その構想の時期は、③、④でもふれた様に確定は困難だが、大正7年夏以降それほど経たない時期ではなかろうか。というのは、以下iii.に記す「ヴェッサンタラ」に強く惹かれた影響が全く見られないからである。
- iii. 大正6年から国訳大蔵經の発行が始まり、大正7年に発行された第13帙所収の「エッッサンタラ所行品」に強く惹かれた。
これは韻文で大意が掴みにくいこともあり、Vessantara-jataka の英訳
Cowell, E.B "The Jataka; or, Stories of the Buddha's former births"
の第6巻 1907(明治40)年も読んだと思われる。(前報参照)
賢治はアンデルセン童話も英訳で読んだらしい事が分かっている。
- iv. iii.を受けて 前述の 1.2 ⑨、⑩、⑪が行われる。
- v. しかし、その熱は冷めて行き、⑩の原稿は人目に付きにくい場所にしまい、
⑩「ドラビダ風」は書き直して"ヴェッサンタラ"は消える。
その理由は、ヴェッサンタラの特に我が子を悪人のバラモンに布施する事への疑問にあるのではないかと思う。
この問題は「彌蘭陀王問經」で取り上げられているのだが、ミリンダ王の問いに対するナーガセーナ長老の答えに納得が行かなかったのが主な要因では無かったのかと思う。
特に名声あるヴェッサンタラ王の子らに酷い扱いをするものは無い筈だとか、
子らの祖父が財宝と引き換えに見受けするだろうと考えたからとか弁護したのが引っかかったのではないだろうか。
恵まれた王の布施行の中に甘えが見えるからである。 i.に記したようにそれは賢治の最も嫌う事だったからである。
- vi. ここで賢治は「布施」全般について検討したのではないか。
国訳大蔵經に所収されている華嚴經にも目を通した筈で、その中で重点的に布施について説いている『金剛幢菩薩十廻向品第二十一』の中の「第六 随順平等善根廻向」(私のホームページ掲載の『華嚴經と捨身』参照)を熟読したのではないだろうか。
- vii. また「捨身飼虎」と「施身聞偈」の本生譚も、それぞれ国訳大蔵經に所収されている『金光明經』及び『涅槃經』から熟読したのではないだろうか。
前者は『国訳大蔵經』 經部第11巻 金光明最勝王經 捨身品 pp210~241)、
後者は『国訳大蔵經』 經部第8巻 大般涅槃經 聖行品 pp427~433)にある。(*2)
伝えるところによると、賢治の読書は速読斜め読みで、関心のあるところを見付けると熟読するスタイルだったそうである。(こんなところだけは私にそっくりであるが)

- viii. vi.とvii.を読み、賢治なりに理想的な捨身についての思いを巡らしたものと思われる。
そして、貧窮の中に生まれ、つらい労働の中で最新知識を学習し、貧窮の民衆の幸福のためには捨身も厭わない行為こそ理想的な布施の典型だという境地に達したものと思われる。
- ix. そして「貧窮の中に生まれ、つらい労働の中で最新知識を学習した」人物は既に「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」のネネムとして表現済みだったので、この原稿を利用して「グスコブドリの伝記」を書き、『児童文学』第2回投稿に合わせて冗長なところを整理するなどして「グスコブドリリの伝記」となったものである。

この様にして賢治は、「グスコブドリ」説話によって「ヴェッサンタラ」や「捨身飼虎」、「施身聞偈」などの「仏教説話として伝わってきた総ての本生譚を超える近代人にも受け入れ可能な新しい「捨身布施」像の創出に成功したと云えよう。

そして、それを人生をかけて実行に至ったのが安岡正篤が言うところの「北一輝」であり、更に民族が一体となって実行に至ったのが私の言うところの「仏説大東亜戦争」という事になると思うのである。

4. 終わりに

私の年初のウェブ年賀状に、昨年は読書に集中した年であったとしたが、この傾向はまだ続いている。本稿では、宮沢賢治の「グスコブドリ」について集中的に読書・検討した結果を記した。それで分かった事は、賢治は膨大な原稿の外大量のメモを残しているが、自分の読書については、書名は元より、感想なども殆ど残していないのである。

それで、賢治の作品・人物に関する大量の研究資料に目を通す事になったのである。

そして、ブドリ物語が、賢治の人生の苦闘の中で生まれた経緯について触れた研究はいくつかあったが(例えば⑫)、ブドリリの捨身とヴェッサンタラ本生譚との関係に立ち至った研究は全く見つからなかった。

それで、私の想像を加えながら両者の関係についての小説的骨組みを構築してみたのが、本文である。

振り返れば一昨年夏「仏説大東亜戦争」を発想したときは、日本民族の心の根底に流れる「捨身布施」への想いの説明に「捨身飼虎図」を用いたが、それでは軽すぎると思った。

その後昨年は、その想いの流れを源流(印度)から華嚴経、明恵上人…と江戸時代まで追ったが、ここにおいて、宮沢賢治の「グスコブドリ」というより明確な近代人にも受け入れ可能な新しい「捨身布施」像を「仏説大東亜戦争」に於ける日本民族の心の根底に据える事が出来たと思い、秘かに満足しているところである。

註

*1 : 「エッッサンタラ」「ヴェッサンタラ」「ベッサンタラ」は典籍などによって表記が異なるが実態は同じものを指している。

*2 : いずれも復刻版による。復刻版では、「エッッサンタラ所行品」も「捨身飼虎」も同一経部第11巻に収納されているが。賢治所有の和装初版本では同一第13帙に収納されているかは未検討。

完